紅葉山人と一葉女史

宮本百合子

青空文庫

今まで、紅葉山人の全集をすっかり読んだ事がなかった。

こないだ叔父の処へ行って二冊ばかり借りて来て、初めて、四つ五つとつづけて読んで居る内にフト気づいた事がある。

それは、一葉全集をよんで感じたと同じ事である。

いかにも立派な筆を持って居られた、と云う事は両方を見て等しく感じる事である。

筆をつけて居る時の苦心の名残は、つゆほどもなく、スラスラと、江戸前のパリパリの筆の運びには、感歎のほかはないのである。

よくこう筆が動いたものだ。

読んだものの、誰れでもが感じる、正直な、幾年たっても変らない感じである。

けれ共、私には、三つ一時につづけて読む事は出来ない、何となしもたれる。

どう云うわけだろう。

一葉全集を読んだ時も、そうであった。

紅葉全集をよんでもそうである。

それは、材料があんまり、同じ様だからと云う事から来るのでは有るまいか。

勿論上下、貴賤、貧富の差はあっても、同じ様に男女関係を骨子としてある。

そのなりゆきを序す筆の達者さ、巧な人物の描写法、活用法に一つ一つ独立させて、異った

時に読めばあきる事をしらないのである。

いかにも、上手に書かれてあると思う。

けれ共、二つ三つと、よし異った形式、事柄でも、よんで居るうちに何となしけったるくなる。

まるで違った材料をあつかったものが欲しくなる。

一葉女史の作品でもそうだと思う。

「にごりえ」から始まって「たけくらべ」に至るまで、同じ様な骨子である。

立派に活きて居る才筆である。

まことに驚くべきものである。

紅葉山人のは勿論、少しは異った材料も、あつかって居られる。

けれ共、それは割合に、作者自身あんまり重きを置いて居られないらしく見える。

紅葉山人の筆があって露伴先生の頭があったらと思う。あんまり沢山読んで居るのでもないしするから、よくわからないけれ共、露伴先生よりは、紅葉山人の方が人物の描写が、何とも云えないほど上手であられる様にも思われるし、又才筆であった。

露伴先生のは、思想がいかにも卓越した、流石は禅学を深くさぐられた先生だけあると思われる。

同じ、馳落を書かれても露伴先生のは、どっかすっきりした禅めいたところがある。

対髑髏（たいどくろ）にしても若しあれを紅葉山人が書かれたものとしたら、そう云う題もつけなさらなかったろうし、又あの女主人公のお妙（たえ）を「隣の女」のお小夜の様な凄い腕の女にされたかもしれない。

露伴先生の様な思想をもって居られたら、あの才筆とともなってどんなに立派なものが遺されたかしれないと思う。

一葉女史にしてもそう云う感じはあざむかれない。

あの「にごりえ」や「たけくらべ」の人物を写す立派な筆、情のこまやかな、江戸前の歌舞伎若衆の美くしかった頃の作者に見る様なこまかい技巧をもって、もう少し考えさせる材料に手をつけられたらばと思う。

私は必して、紅葉山人や一葉女史が、取るに足らない作家だったとか何とかけなすのでは必してない。紅葉山人が、用語の上に非常な苦心をもって、新らしい試をされたのだけでも氏の遺業は大なるものであると尊ぶのである。

一葉女史にしても、そのまれに見る才筆にはいかなる賛辞も惜しまないのである。

けれ共、今云った様な事を感じたのは、かくす事は出来ない、——又、かくしたいとも思わない事実である。

この両作家の居られた時代を考えれば、それが必して智識の浅薄であったとか、研究の足りない頭であったとかは云われないのである。両氏が居られたのは明治三十年前後で、一葉女史

の世を去られたのは明治二十九年、紅葉山人は明治三十六七年に、没せられたと覚えて居る。

いずれも、我が文学界に大なる改革の行われる導火線であった日露戦争前に栄えて空しくなられたのであるから、日露戦争以後に起った文学――哲学的な、宗教的な、自箇の思想、箇人性を発揮し様とする文学を見る機会が少なかった、――或はまるでなかったかもしれなかったからでも有ろう。

とは云え、紅葉山人は外国のものも沢山こなして居られたのではあるが、一般的に海外の文学的思想が流入して居なかったから、よし書かれたとしても、「此のぬし」「おぼろ舟」等の様な賞讃は或は受けられなかったかもしれない。

時代のためも有ろう。けれ共、私は一葉女史と紅葉山人の作品にはその形式技巧や筆致の上にはこの上なく感心はしながらも、材料と思想が何だか物足りぬ。

まだ、ろくに「いろは」も書けない様なものがこんな事を云うのもあんまり生意気の様ではあるが、やっぱりあの頃に二葉亭四迷が「浮草」ほどの心理描写をしたものが世に出て居たとすれば、紅葉山人の終りの方の作には或る面白い変化があれば、あられたろうと思う。

あの「青葡萄」は何となし目につく。

事実をありのまま書かれた故でも有ろう。

病気、殊に、恐ろしい「コレラ」と云うものに対しての恐怖、先生が病気の弟子を思う心、あれは立派な心理描写である。

あれだけ鋭い神経を持って居られたのだから、勿論、恋愛を骨子として書かれたものでも、凄いするどいものがある。

隣の女の後ろの方を読んだものが、ゾーッとするのもそれである。

尺八上手の男が小夜に釣られて行ったあげく、女の情夫の死骸――しかも現在自分に呼び出しをかけた女の手にかかって死んだ男の死骸をかたづけさせられ様とは、そこまで行かなければ誰も思うものではない。

只景気のいい人の顎をとかせる前題で、最も印象を深く与えるべき最後に至って、読むものの気持に、白刃の峰打ちを喰った様な感じを与えるのは、山人の感情の現れであり技巧である。

紅葉山人と一葉女史を日露戦争後まで活かして置いたらとつくづく思う。

両氏の才筆に、深刻な思想が加わらなかったのがいかにも物足りぬ、残念な事に感じられるのである。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集　第三十巻」新日本出版社
　　1986（昭和61）年3月20日初版発行
※1915（大正4）年1月5日執筆の習作です。
入力：柴田卓治
校正：土屋隆
2008年2月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紅葉山人と一葉女史

宮本百合子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/